

地球の未来に続くしごと

尾瀬の森に木を植える。

豊かな森を再生したい。そして、未来にそれを引き継ぎたい。熱い思いを持って、尾瀬の保護活動に取り組んでいる人がいます。竹内純子さん、今年植えたブナの木は、大きく育ちそうですか？

写真：堀内成哲

「おきなさい、おきなさい。春ですよ。」

やさしい声が聞こえてきます。ブナのお母さんがブナの赤ちゃんをおこしているのです。その声によばれて、さいしょに目をさましたのは、ブーナンでした。

竹内純子さんが著した絵本『森のともだち』は、ここから始まる。

ブナの赤ちゃん・ブーナンは、クグマのクータンとともに成長し、クータンとの永遠の別れを経て、「森のまもりがみ」といわれる大木になってゆく――。その舞台となっているのが、尾瀬戸倉の森だ。

「新芽を踏まないように注意してくださいね」

樹齢300年を超えると思われるブナの大きな木の下で、竹内さんは言った。落ち葉が降り積もったふんわりとやわらかな土の上。よく見るとそ



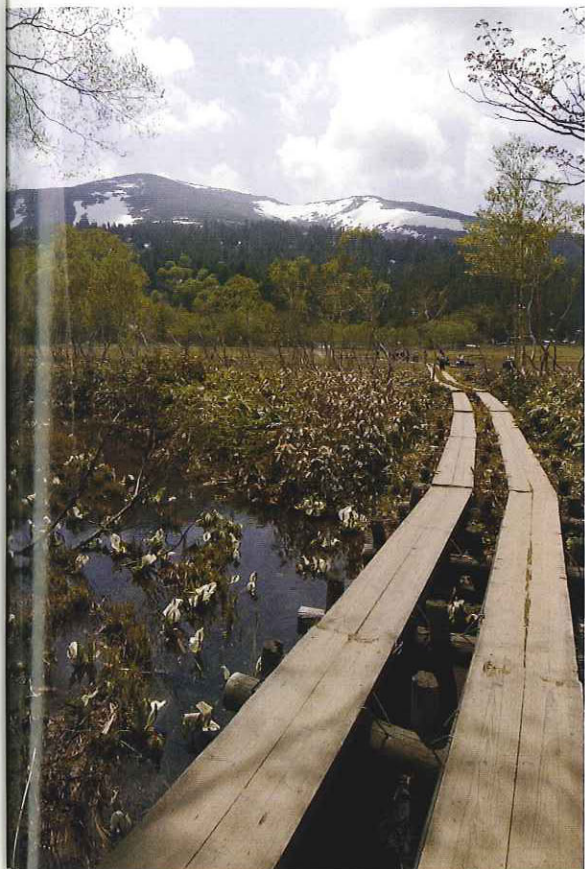
芽生えばかりのブナ。大きく育つのはごくごくわずかだ。



絵本『森のともだち』（東京電力発行）は、'01年に発行され、5版を重ねる。左ページ下のウェブサイトでも見ることができる。

こには、無数の小さなブナの芽が顔を出していた。

群馬、福島、新潟の3県にまたがる尾瀬は、希少な動植物が生育する自然の宝庫として知られる。実は尾瀬の7割は、東京電力の土地。社内の人材公募制度によって、自ら希望して尾瀬保護活動担当となった竹内さんは、木道の敷設や、浄化槽を完



ハイカーの踏み荒らしから湿原を守るために敷設された木道。総延長は57km、うち20kmを東京電力が敷設、管理している。



竹内純子

たけうち・すみこ／東京電力用地部 尾瀬保護活動担当。木道の整備や市民ボランティアとの共同作業でブナ植林に携る。一方、森や自然の大切さを広く世に伝える役割も。

備した公衆トイレの整備、戸倉の森でのブナの植林などを通じて、尾瀬の自然を守る活動を続けています。毎年5月、市民ボランティアを募って行われるブナの植林は、今年で10年目を迎えた。一年に2500本ずつ植えられる木は、2万5000本を数えるまでになった。

「戦後の復興期から64年まで、尾瀬の山林では多くの木が伐採されて、その跡には木材として、成長の早いカラマツが植えられていったんです。

'96年に大規模な山林調査を行ったところ、カラマツの人工林のうち、一部は、樹木の生育状態がよくないことがわかりました。ではそこを、尾瀬本来の植生であるブナを中心とした広葉樹の森に戻してはどうか、というところで植林が始まったんです」

因、CO₂を吸収して酸素を作り出してくれる森。「みんなのかけがえない財産、尾瀬の森をみんなで守ろう」。東京電力の呼びかけに応じるボランティアは年々増え、今年は1200名を超す応募が寄せられた。「ブナの植林は、未来の地球に2つのプレゼントを贈る場だと思っ

生まれるエコの芽。参加者からは、「植林をきっかけに、自然保護の大切さを考えるようになった」という声がよく届くんですよ。心に芽生えた小さなエコの芽が、その人から周りの人に、また、その人の子供や孫に受け継がれて、大きく育っていき

けでなく、人々に広く伝えることも自分の大切なしごと、と思うようになったそう。ホームページでは、尾瀬の現況をこまめに発信。「森のともだち」は、子供たちに森への親近感を持つてほしい、という願いを込めて書いた。ときには学校を訪問して、教壇で熱く語ることもある。「人がそこまでして守ろうとする尾瀬はどんなところなのだろう」と、生徒たちに思わしめたら、

エコの種まき成功である。「わたしたちは苗木の成長を見届けることはできないけれど、いいんですよ、それで」。植林後、そう言って微笑んだ老夫婦がいたという。そのとき竹内さんは、この木の未来の姿に思いを馳せ、未来に続くしごとに携る喜びをひとり静かにかみしめた。ブーナンのように森の守り神となった木の下で、子供が得意げに話している。「これはひいおじいさんのひいおじいさんが植えた木なんだよ。すごいでしょう」。



尾瀬戸倉の山林に残るブナの巨木。「森は、人間がそこにいて心から気持ちいいと思える場所」と竹内さん。

